

箕の「呪具」性が意味するもの

平 良 直

はじめに

私たちはモノに囲まれて生きている。衣服、生活用品、道具などの身の回りのものから、建築物などがモノである。あらためていうまでもないことであるが、世界は物質（モノ）を基礎にし、私たちをとりまくモノは、与えられた自然環境のなかで人間によって作り出され、環境を改変し、居住可能な世界を作りだしている。作りだされたモノはしばしば「文化」として認識される。この「文化」は、モノを越えた価値のように理解されがちであるが、実際はモノと分かちがたく結びついている側面がある。モノは人間が作りだしたモノでありながら、しばしば人間の意識や精神に影響を与え、またときに人間の身体と連続し、モノが身体化し、またときに人間とモノが一体化する。人はモノを作り出すと同時にモノによって作られているのだともいえる。

人がモノと絡み合いながら生きているということ、具体的に物理的な世界に生きているという、ごくあたりまえの在り方をこのように表現することを、仰々しく感じるかもしれない。しかし、人間の文化が物質性と分かち

がたく結びついていることを確認しておくことは文化事象を研究する者にとって重要である。

文化の研究を学の名称に冠して牽引してきた文化人類学研究の大きな流れは、博物学的な関心から異文化のモノ（西洋人による非西洋世界のモノ）の収集の時代を経て、対象とする文化の社会構造の把握や、文化の象徴論的解釈の隆盛の後、人類学自体の他者記述の在り方をめぐる反省がなされ、（文化）人類学のあらたな文化研究の対象を模索するなかで、あらためて人間の文化とモノとの関係性に関心が向けられるようになっていく⁽¹⁾。宗教研究の領域でも、フェティシズム概念が歴史的にどのように構築されたかについて、その系譜を再検討し、人とモノと身体の交錯する現代の諸事象を新たな視角から読み解こうとする研究が見られるようになっていく⁽²⁾。

また、モノと人の関係でいえば、古くから文化とモノについて関心を持ち続けてきた日本の民俗学研究においては、かねてより民具研究（日本民具学会）を中心として民俗文化を構成するモノに注目し、ねばりづよく研究がなされてきた。そこには、単に伝統が消失していくという危機意識だけではなく、文化はモノという形あるものと切り離せないという認識があったといえよう⁽³⁾。

人がモノを作りだすと同時に、モノが私たちの生活世界、文化、そして我々の意識を作りだすということは、古くからの伝統のなかだけにみられるものではなく、現代社会においてもみとめられることである。日々あふれるように作りだされるモノは、私たちの生活世界や社会をまさに作りだし続け、そして私たちの世界についての認識を作り続けている。近年の人類学に限らず、諸領域で注目される主題となっている人とモノの関係性を、あの伝統的な道具を通してその一端を検討することが本稿の目的である。

考察の対象となる伝統的な道具とは表題にしめした、箕である。箕は現代の都市民にはなじみのないものかもしれないが、穀物を収穫し、穀物の実を不要なものと選別する農具として古くより用いられたものである。日本

では、弥生時代に使用されていた竹製の箕が奈良の唐古・鍵遺跡においてほぼ完全な形で発掘されている。その形状を見ると、ほぼ現在の箕と同じである。日本以外でも、穀類の実と殻の選別用具として、また農に関連する作業に古くから用いられていた。

箕は、穀物の農作業の実用的な農具でありながら、祖霊祭祀、人生儀礼など民俗の諸儀礼で祭具としても用いられてきた。民俗学の研究では、しばしば民俗信仰の心意表現として理解され、儀礼で使用される箕は、「呪具」として把握されてきた。本稿では、この箕の「呪具」性について、先行研究を援用しつつ、考察していきたい。考察は主に箕が儀礼のなかで用いられる事例を通して行うが、人とモノの関係という、より大きな主題へとつなげていきたい。

一、箕とは

(1) 農具としての箕

箕は、図1にあるように片口が外に開き、取っ手部分がU字状になった選別用の農具である。農業には欠かせないものとして農家の納屋に何枚も保管されていたようである。

材質が異なることがあるが、形状はほぼ同様である。箕は、主に「簸^ひる」作業のためのものである。「簸」とは『字通』には、「ひる・あおる」と訓読し、「米を揚げて糠(ぬか)を去るなり」とあり、箕(み)に入れた米をふりあげるようにして、そのもみがらなどを去るをいう」と記されている。「簸^ひる」とは箕をあおるように動かすことで穀類などの実と殻とを選び分ける作業のことを指す。明治の百科事典『古事類苑』には箕で「簸^ひる」